



# 地域おこしと 文化財

---

笹本 正治 著

ほおずき書籍

## まえがき

私たちの社会は未曾有の転換期にあります。様々な局面で、これまで推し進めてきた社会制度や、日常生活・価値観にほころびが見えてきました。

日本国は毎年膨大な国債発行によって何とか財政をやりくりしていますが、その借財は私たちの子どもや孫の肩にのしかかります。私たちが約束されていたはずの退職金や年金すら当てにはなくなりました。国民の税金をあれだけつぎ込んだ銀行、毎年膨大に支出されているアメリカ軍への思いやり予算、国土を切り裂いて建設される道路、これらに対して効果の検証や責任の追求はほとんどなされなままに、財政支出が進んでいます。

何よりも戦後の日本の発展を支えてきた平和憲法すら、自衛隊のイラク派兵によって踏みじられようとしています。しかもこれを議論した国会の実のないこと、きちんとした説明はなされなままに政府の案が、多数決で承認されました。国民の代表者である議員たちの何と無責任なこと、怒りをおぼえます。

私たちのまわりでは十分な住民の立場からの議論や合意なしに市町村合併が推し進められ、学生の立場を考慮することなく大学が独立行政法人化しました。

何かというと予算のことだけが語られ、将来の日本や地域をどのようににしたいという長期ビジョンが示されません。それは国だけでなく、市町村でも同じだと思えます。そのよ  
うな中で、お金にならないと目されている文化財行政は、お先真つ暗というのが実情です。  
長野県の文化財行政はその典型で、県が文化財に対して投ずる金額は県の広さ、文化財  
の多さなどを考えてみると、近県に比較しても恥ずかしい限りです。

予算効率だけが問題にされる中で、地方やそこに息づいてきた文化は切り捨てられても  
良いのでしょうか。そんなわけがありません。

私たちはいかにして未来を切り開いていくべきか、今こそ真剣に考える時期です。まず  
は、私たちが住んでいる地域をいかにしてよくしていくか考えねばなりません。その際に  
材料になるのは過去でしかありません。これから地域が真に元気になるためには、地域に  
残る文化財を、本当の「財」として認識し、活用していく必要があります。

私はこれまで長野県内各地で、地域文化の認識を通して精神的に豊かになろうと訴え続  
けてきました。本書にまとめたのは各地で話す機会を得た講演の一部です。

地域をおこすとはいったいどういうことなのか、現在に生きる我々にとって未来とは何  
か、少しでも考える材料になれば幸いです。